

# 広島都市学園大学地域子育て支援拠点事業の 役割に関する一考察

— 利用者への質問紙調査から —

富田 道子

広島都市学園大学 子ども教育学部

## 要 旨

本研究は、聞き取り調査と質問紙調査から、広島都市学園大学オープンスペース利用者の生活実態とニーズを把握し、今後の子育て支援拠点事業の方向性を探る基礎的資料とすることを目的とする。調査結果は以下の通りである。第一に、保護者は30代が約75%を占め、子どもについては0歳から2歳まで偏りなく利用されていることが明らかになった。また、初めて子育てを経験する者が約6割いることも明らかになった。第二に、多くの利用者が家庭生活に満足していることが明らかになった。第三に、多くの利用者はオープンスペースの事業内容に興味を持っていることが明らかになった。第四に、保護者の年齢に関わりなく、子どもについての気がかり・心配ごととして5割以上の者が「食事」を挙げ、40代の保護者は「からだの成長」も心配していることが明らかになった。また、食事についての気がかり・心配ごとの記述内容から、保護者への支援が求められていることが示唆された。

キーワード：地域子育て支援、大学、オープンスペース、保護者、乳幼児

## 1. 研究の背景と目的

### (1) 研究の背景

2014年6月17日、内閣府が「平成26年版少子化社会対策白書」を公表した。それによると、日本人の平均初婚年齢は2012年で夫が30.8歳（対前年比0.1歳上昇）、妻が29.2歳（同0.2歳上昇）と上昇傾向を続けており、晩婚化が進行していることが明らかになった。また、出産したときの母親の平均年齢をみると、2012年の場合、第1子が30.3歳、第2子が32.1歳、第3子が33.3歳と、前年に続き第1子出産年齢が30歳を超え、晩産化が進行していることも明らかになった。さらに、男性の労働状況に目を向けると、2005年に成立した次世代育成支援対策推進法や、2009年に改正された育児・介護休業法によって、企業は労働者の仕事と子育ての両立を実現できるよう雇用環境の整備が求められ、週60時間以上の長時間労働をしている者は、どの年代においても2005年以降減少傾向にある。しかし、2013年現在、子育て期にある30代男性は17.6%、40代男性については17.4%が週60時間以上の就業となっており、他の年代に比べ高い水準となっていることが示された。つまり、2009年から子育て世代男性のワーク・ライフ・アンバランスな状況はそれほど変わっていないということになる。

加えて、財団法人こども未来財団の調査<sup>1)</sup>では、10代から40代の子育て家庭の85%が核家族世帯であり、配偶者の子育て支援が得られると答えた女性は57%に留まっていること

がわかった。また「支援家族が誰もいない」(14%),「社会から隔絶され、自分が孤立しているように感じる」(49%),「不安や悩みを打ち明けたり、相談する相手がいない」(21%)を合わせると、84%の女性が孤立しやすい育児環境にあることが明らかとなった。

## (2) 研究の目的

ここ約20年間で、「少子化」の名の下に政府が打ち出した政策は変化した。なかでも子育て支援政策については、これまで支援の場の提供、講座の設置、子育て相談、情報提供などを支援者主導<sup>2)</sup>で行ってきたが、近年は親同士の相互交流を図りながら、親育て・子育て・子育てといった観点から子育て支援をすすめている。地域子育て支援拠点事業はこの支援政策の一つであり、2014年7月に事業を開始した広島都市学園大学(以下、本学とする)内にある「公募型常設オープンスペース」(以下、オープンスペースとする)もその一端を担っている。

厚生労働省によると、2014年現在、地域子育て支援拠点事業は5,968ヶ所で実施されている<sup>3)</sup>が、大学に特化すると、学内に子育て支援拠点事業のための施設をもつ大学は49校であった<sup>4)</sup>。その事業内容を各大学のホームページで確認すると、主に親子が自由に遊べるスペースの提供、手あそび歌、絵本の読み聞かせ、工作、体操などが行われ、特別企画として講演会や調理実習、なかには英才教育的プログラムを提供するところも存在した。本学における地域子育て支援拠点事業のあり方を考える時、オープンスペース利用者の実態を把握した上で事業内容を検討することが、国の打ち出した支援政策の目的に叶うものと捉えた。

そこで本研究では、本学オープンスペース利用者を対象とした質問紙調査から、利用者の生活実態を把握し、今後の地域子育て支援拠点事業の方向性を探る基礎的資料とすることを目的とする。

## 2. 研究方法

### (1) 地域子育てサークル事前調査

オープンスペース利用者への質問紙調査実施にあたり、質問項目の検討を目的に、広島市南区にある公民館を通して、館内で活動する5つの子育てサークルに聞き取り調査への協力を依頼した。その結果、すべてのサークルから同意が得られたため、その後は各サークル代表者と連絡を取りながら、面接場所・時間等を設定し、聞き取り調査を実施した。実施時期は、2014年

表1 対象サークルの概要及び聞き取り対象者・場所

サークル	会員数	主な活動内容	聞き取り対象者	聞き取り場所
A	16組	リトミック 体操 手遊び	サークル 役員4名	大学 オープ ンスペ ース
B	64組	体操	サークル 役員2名	大学 オープ ンスペ ース
C	20組	歌・お絵かき お遊戯	サークル 役員1名	公民館
D	8組くらい 乳児を持つ母親 中心	お母さんと 赤ちゃんヨガ	サークル 参加者	公民館
E	20組 乳児を持つ母親 中心	お母さんと 赤ちゃんの 交流会	サークル 参加者	公民館

表2 対象サークル聞き取り調査結果（概要）

サークル	サークル内での声（子育てに関する悩み、気になること、心がけていることなど）
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食物アレルギー（卵、牛乳、小麦、ジャガイモ）</li> <li>・偏食（野菜食べない。パン・コメなど穀物しか食べない。おかずを食べない。肉は塊では食べない）。</li> <li>・何でも食べてくれるから、料理がワンパターンになりやすいのが悩み。レパートリーを増やしたい。</li> <li>・食事をかまない。丸呑み。どうやったらゆっくり食べられるのか。</li> <li>・「痛い」といって親の関心を引く。</li> <li>・生まれてすぐに子どもだけ転院、という経験があった。「お母さん」になれるだろうか、という気持ちがあった。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「お母さんたちと、悩みなどについてゆっくり話をするということはないけれど」と前置きをしながら、</li> <li>・病院（何科でも）情報がほしい。薬をすぐ出してくれる病院とそうでない病院がある。</li> <li>・肉や魚がかめない。野菜はそれを見たら食べないので、調理で工夫している。</li> <li>・骨格が心配。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トイレトレーニングの時期（2歳）</li> <li>・昼寝するかしないか。それにかかわって寝る時間。</li> <li>・食事の好き嫌い（野菜嫌い）。お弁当に入れると食べてくれる。お昼はそうにしたほうが良いといった会話がある。</li> <li>・卵・牛乳アレルギーのお子さんがいて、授乳中のお母さんが「アイスクリームが食べられない」と言っていた。</li> <li>・「小柄なんですよ」「標準よりは小さいほうなんですよ」と、身長を気にされておられる方がおられる。自分の子も母子手帳の発達曲線よりも下だったので、気になった。</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野菜を食べない。</li> <li>・添加物が何にでも入っているので、気になる。ただ、無添加にこだわりすぎると、買うものがなくなり、費用もかさむ。ボーダーは？</li> <li>・昆布だしでは飽きてきたのか、食べなくなった。アレンジの仕方を知りたい。</li> <li>・全部悩み。食べない。ムラがある。</li> <li>・ピーナッツがだめ。3歳の時、アナフィラキシーショックを体験した。</li> <li>・生卵でなければ大丈夫。相談しながら進めてきた。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>・離乳食に関する情報は豊富だが、意外と幼児食（1歳半～）はない。味つけなどの工夫。</li> <li>・好き嫌いがある（野菜・肉の塊は噛み切れない・ご飯が好きじゃない）。</li> <li>・メロン・魚アレルギーもある。</li> <li>・アレルギーの子ども用レシピがほしい。</li> <li>・離乳食はいつから？「肉など早くから始められる」というけれど、野菜から肉を食べるまでの過程は？</li> <li>・離乳食を始める時期、人により言うことが違う。一体いつが正しいの？</li> </ul>

5月～6月である。なお、倫理的配慮として、調査にあたっては本学倫理審査委員会の承認を得ている。手法は半構造化面接法とし、所要時間は30分～40分とした。また、調査対象者の許可が得られたため記録はICレコーダーに録音した。

聞き取り調査では、サークルの会員数、運営方法、講師など指導者の有無、主な活動内容、サークル内で聞かれる会員の子育てに関する悩みなどの声について尋ねた。その概要は表1・表2の通りである。子育てに関する悩みとして、トイレトレーニングや子どものからだの成長なども出されたが、多くは偏食、食物アレルギー、食べ方（噛まない、飲み込む）、調理方法、離乳食を食べさせる時期など、食についての悩みであった。

## （2）質問紙の作成

聞き取り調査結果を念頭に置き、「子どもアンケート調査票見本」<sup>5)</sup>と「子育て支援等に関する調査」<sup>6)</sup>における項目を参考にして質問紙を作成した。調査項目の内容は、子ども

の人数と年齢、オープンスペースを利用している子ども、保護者の年齢、同居者、何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族の有無、本学以外の子育て支援拠点事業や子育てサークルの利用の有無、オープンスペースに行ってみようと思われた理由、子どもについての気がかり・心配ごとの有無、生活面での満足度など10の大項目を設定し、選択式設問（複数回答型含む）とした。さらに、オープンスペースへ行ってみようと思われた理由、子どもについての気がかり・心配ごとについては「その他」の選択肢も設け、自由記述式とした。

なお、質問紙への回答はオープンスペース利用時間内に行うものであるため、フェイスシートに「調査に同意する・しない」の項目を設け、利用者がいずれかの項目に印すことで質問紙への回答に進むか否かを決める形式をとった。

### **（３）質問紙調査対象者・調査方法・調査時期**

質問紙調査の対象者は、オープンスペースを利用している保護者119名である。利用者の居住地は多くが広島市南区内にあり、このフィールドはかつて広大な軍用地や施設であったところが戦後埋め立て地に造成され、再開発された商業住宅地になった地域である。

調査方法は、まずオープンスペースを初めて利用する保護者に調査依頼状と質問紙を手渡し、調査の目的とともに、①調査依頼状の内容に目を通した上で、フェイスシートの「調査に同意する・しない」のいずれかに印す。②「調査に同意する」者は各調査項目に回答後、また、「調査に同意しない」者は未記入のまま、質問紙を所定の場所に設置した箱に提出する、という手順を説明した。なお、プライバシー保護のために、回答中の利用者がある場合、調査員はオープンスペース内にいないことを心掛け、さらに、質問紙を回収の際、子育てアドバイザーや他の利用者に回答内容がわからない場所に箱を設置した。

調査時期は2014年7月～9月である。なお、ここでの調査も本学倫理審査委員会の承認を得ている。

### **（４）分析方法**

質問紙調査における回答は、基礎統計量と回答の割合で集計し、全体的な傾向を把握した。

また、項目間の関連性をみるために、SPSS Ver22を使用してクロス集計を行った。

## **３．結果と考察**

### **（１）属性・家庭環境**

調査依頼をした119名すべての利用者から同意が得られた。オープンスペース利用者に関する属性と家庭環境は次の通りである。

保護者の年齢は30代が最も多く、全体の約75%を占めた（表3）。子どもについては0歳から2歳まで偏りなく利用されていることがわかった（図1）。また、利用する子どもの詳細をみると、第1子のみ利用が約6割、第1・2子利用と第2子のみ利用がそれぞれ

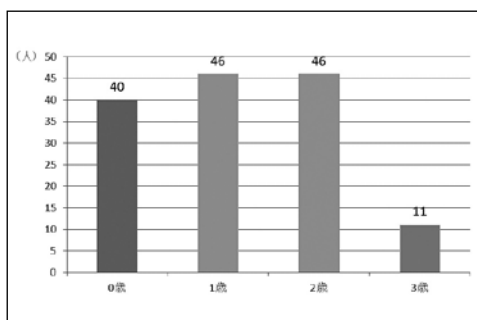


図1 子どもの年齢別利用者数

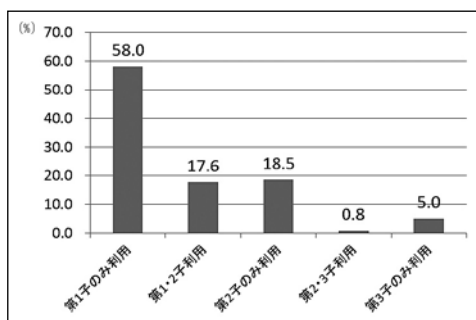


図2 子どもの生まれ順別利用率

表3 利用保護者の年齢

	%	人数
20代	15.1	18
30代	74.8	89
40代	10.1	12
計	100	119

表4 すぐに頼れる親族

頼れる人	%	人数
母	9.2	11
父母	6.7	8
母・兄弟姉妹	3.4	4
父母・兄弟姉妹	5.0	6
父母・その他親族	4.2	5
母・義母	4.2	5
母・義父	1.7	2
母・義母・兄弟姉妹	0.8	1
父母・義母	1.7	2
父母・義父母	10.1	12
父母・義父母・兄弟姉妹	4.2	5
父母・義父母・その他親族	1.7	2
義母	2.5	3
義父母	13.4	16
兄弟姉妹	4.2	5
その他親族	3.4	4
頼れる人なし	23.5	28
合計	100	119

約2割となっている（図2）。

家庭環境は、利用者の97.5%が核家族であり、何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族の有無では、約7割が父母か義父母を挙げており、頼れる親族はいないと回答した者は23.5%であった（表4）。

生活面に関する満足度は、住んでいる地域、家庭生活、余暇の過ごし方、友人関係、健康状態のいずれも8～9割の利用者が「満足」「まあ満足」と回答した（生活面に関する満足度の表については省略）。

## （2）オープンスペース利用の理由

オープンスペース利用の理由を尋ねた結果は、表5の通りである。「口コミやチラシで知り、興味をもった」が80.7%であり、「子どもの友だちづくり」が23.5%、「その他」が19.3%、「（保護者の）知り合いづくり」が12.6%となった。「その他」に記述された内容には、「近くにできると知って」「友人に誘われて」「新しい遊び場を探していた」などがあった。

### (3) オープンスペース以外の子育て支援 拠点事業・子育てサークル利用率

オープンスペース利用者の、区役所や公民館など他の子育て支援拠点事業・子育てサークルを利用している者の割合は93.2%であることが明らかとなった(表は省略)。

### (4) 頼れる親族がいない者のセンター 利用の理由

何かあった時にすぐに頼れる(近居している)親族がいないと回答した23.5%の利用者について、オープンスペース利用の理由との関連をクロス集計した(表6)。「口コミやチラシで知り、興味をもった」が85.7%と最も多く、次いで「その他」が25.0%となり、「子どもの友だちづくり」や「(保護者の)知り合いづくり」などの項目への回答は少なかった。

### (5) 頼れる親族がいない者のオープン スペース以外の子育て支援拠点事 業・子育てサークル利用率

頼れる親族がいないと回答した23.5%の利用者について、オープンスペース以外の、区役所や公民館などの子育て支援拠点事業・子育てサークルを利用している者の割合は92.8%であることが明らかとなった(表は省略)。

### (6) 子どもについての気がかり・心配ごと

子どもについての気がかり・心配ごととして、「食事」を挙げた者が53.8%、「からだの成長」が18.5%、「運動機能」が8.4%、「その他」が14.2%であることが明らかになった(表7)。「その他」の記述内容については、トイレトレーニングやしつけなど、先述した子育てサークルへの聞き取り調査結果と内容が重なることが確認できた。「その他」の詳細については他に譲るとする。さらに、「食事」を挙げた53.8%(64名)に、複数回答可としてその詳細を尋ねたところ、「好き嫌いがある」(34名)、「食物アレルギーがある」(7名)。

表5 オープンスペース利用の理由(複数回答)  
n=119

理 由	%	人数
口コミやチラシで知り、興味をもった	80.7	96
とにかく人が集まるところへ行きたかった	5.9	7
気分転換	5.9	7
悩みが話せる	6.7	8
子どもの友だちづくり	23.5	28
(保護者の)知り合いづくり	12.6	15
その他	19.3	23

表6 「頼れる親族がいない人」の  
オープンスペース利用の理由(複数回答)  
n=28

理 由	%	人数
口コミやチラシで知り、興味をもった	85.7	24
とにかく人が集まるところへ行きたかった	7.1	2
気分転換	3.6	1
悩みが話せる	3.6	1
子どもの友だちづくり	7.1	2
(保護者の)知り合いづくり	7.1	2
その他	25.0	7

表7 子どもについての気がかり・心配ごと

項目	%	人数
からだの成長	5.9	7
食事	37.8	45
からだの成長・食事	7.6	9
食事・運動機能	3.4	4
からだの成長・食事・運動機能	5.0	6
その他	14.2	17
なし	26.1	31
計	100	119

「噛まない」（7名）, 「そもそも私は料理が苦手」（14名）, 「その他」（32名）という回答が得られた。食事の「その他」の記述内容については後述する。

## （7）利用保護者の年齢別気がかり・心配ごと

子どもについての気がかり・心配ごとについて、利用保護者の年齢との関連をクロス集計した（表8）。その結果、「食事」は保護者の年齢に関わりなく、5割以上の者が気がかり・心配だと回答した。さらに、「からだの成長」は40代の保護者の気がかり・心配率が20・30代の保護者よりも高いことがわかった。

## （8）食事に関する気がかり・心配ごとの自由記述

子どもの食事についての気がかり・心配ごとで、「その他」に記述された内容をみると、「食べ方」に関するものが最も多く、次いで離乳食の「進め方」, 「調理技術」, 食材の「調理方法」, 子どもの「嗜好」が挙げられた（表9）。

表8 利用保護者年齢別 子どもについての気がかり・心配ごと

項目	保護者の年代		20代		30代		40代	
			%	人数	%	人数	%	人数
からだの成長			0.0	0	4.5	4	25.0	3
食事			38.9	7	36.0	32	50.0	6
からだの成長・食事		55.6	11.1	2	6.7	6	8.3	1
食事・運動機能			5.6	1	3.4	3	0.0	0
からだの成長・食事・運動機能			0.0	0	6.7	6	0.0	0
その他			16.6	3	15.7	14	0.0	0
なし			27.8	5	27.0	24	16.7	2
計			100	18	100	89	100	12

表9 食事の気がかり・心配ごと 「その他」自由記述 n=32

分類	記述例	記述数	
食べ方	食べない。あまり食べない。食べる意欲がない。	11	20
	食欲にムラがある。	7	
	食べる時あそんで、時間がかかる。	2	
進め方	バランスよく栄養が摂れているかわからない。個人差があるのはわかるが、どのくらいの量をたべればいいのか？	2	6
	離乳食の進め方が色々ありすぎて、正しいのかどうか悩む。	3	
	幼児食への移行時期がわからない。	1	
調理技術	料理のレパートリーがなく、味付けをどれくらいにしていいいかわからない。	4	4
調理方法	大きい食材、かたい肉など戻してしまう。	2	3
	もぐもぐ（舌でつぶす事）が苦手。	1	
嗜好	見た目嫌がる。	1	2
	ほとんど炭水化物しか食べない。	1	

## (9) 考察

まず、属性と家庭環境の分析より、オープンスペース利用者の場合、核家族世帯の割合が非常に高いことが明らかになった。しかし、利用者の約7割には何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族がおり、全体に生活への満足度も高く、精神的にゆとりのある生活を送っている者が多いことがみえてきた。

オープンスペース利用の理由については、「口コミやチラシで知り、興味をもった」と回答した利用者の割合が80.7%であった。利用者の、オープンスペース以外の区役所や公民館などの子育て支援拠点事業・子育てサークルを利用している割合が93.2%と非常に高いことから、利用者の積極的に外へ出かけようとする様子がうかがえた。また、先述した子育てサークルへの聞き取り調査の「主な活動内容」で得られた回答から、オープンスペース利用者は、利用者全員が同じプログラムをこなす活動ではなく、子どもの関心事に寄り添いながら、親子で自由に時間・空間を共有し、保育士、教員、学生など、さまざまな立場の者と関われる点に関心を寄せていることが推察される。

何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族がいないと回答した23.5%の利用者について、オープンスペース利用の理由との関連をみたところ、「口コミやチラシで知り、興味をもった」と回答した者が85.7%と最も多いことが明らかとなった。集計前には「気分転換」「子育ての悩みを気軽に話せる場がほしかった」「知り合いをつくりたかった」の回答が多いであろうと予測していたが、実際にはこれらの項目への回答はごくわずかであった。また、オープンスペース以外の、区役所や公民館などの子育て支援拠点事業・子育てサークルを利用している割合も92.8%と高かった。頼れる親族がいない者も積極的に外へ出かけようとしており、さらに、理由の「その他」の項目に記述された内容を見ていくと、「家以外の色々なところで、できるだけたくさんの体験をしてほしかったため」「安心・安全に子供が遊べる場所がほしかったから」「自宅近くに子供のオープンスペースが今までなかったので、嬉しい。親以外の第三者がいて下さると、少し安心する」「身体測定ができるから」など、頼れる親族がいる利用者の「近所だから」「遊べる場所を増やしたかった」といった内容と比べ、より具体的な記述がなされていることが明らかとなった。

子どもについての気がかり・心配ごとについては、利用者の年齢に関わりなく、5割以上の者が「食」を挙げており、子どもの「食べ方」に関するものや離乳食の「進め方」など具体的な内容が明らかになった。また、「からだの成長」は40代の保護者の気がかり・心配率が20・30代の保護者よりも高いことがわかった。さらに、「その他」の項目の記述内容から、保護者は子どもが離乳食をうまく食べない、食べられないことを心配し、さまざまな情報に戸惑う様子もうかがえた。子どもの「食べる」機能は3歳までゆっくり時間をかけて育つものであり、子どもが上手に食べられるようになるためには、子ども一人ひとりの心身の発達段階に応じて臨機応変に対応する必要がある。加えて、子育てする側からみた「食べない」は、育ち中の子ども側からみれば「食べにくい」「食べられない」とも考えられる。保護者同士の交流を促し、各家庭の調理方法の工夫など情報交換ができる



ような働きかけをするなど、保護者への支援が求められていることが示唆された。

#### 4. まとめと今後の課題

オープンスペースを利用している保護者を対象に質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。

第一に、保護者は30代が約75%を占め、子どもについては0歳から2歳まで偏りなく利用されていることが明らかになった。また、初めて子育てを経験する者が約6割いることも明らかになった。第二に、多くの利用者が家庭生活に満足していることが明らかになった。第三に、多くの利用者は他の子育て支援拠点事業や子育てサークルに参加しつつ、オープンスペースの事業内容にも関心を持っていることが明らかとなった。第四に、子どもについての気がかり・心配ごととして、保護者の年齢に関わりなく5割以上の者が「食事」を挙げ、40代の保護者は「からだの成長」も心配していることが明らかとなった。また、食事についての気がかり・心配ごとの記述内容から、保護者への支援が求められていることが示唆された。

以上のことから、利用者の生活実態とともに、今後の子育て支援拠点事業の方向性が確認できた。本調査結果を参考に、保育士の協力も得ながら、事業内容を検討・実施していきたい。

#### 謝辞

聞き取り調査にご協力くださいました公民館および子育てサークルの皆様、質問紙に回答下さいました本学公募型常設オープンスペース利用者の皆様に厚くお礼申し上げます。

#### 引用・参考文献

- 1) 財団法人こども未来財団.子育て中の母親の外出時等に関するアンケート調査結果(抜粋), 2004. p.3-4
- 2) 名須川知子, 楠本洋子. 親育てプログラムの効果に関する研究―3年間の母親子育て意識の変容を中心に. 兵庫教育大学研究紀要2011: 38: 1-8
- 3) 厚生労働省. 地域子育て支援拠点事業実施状況(交付決定ベース). (<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/24jokyo.pdf> 2014.4.24アクセス)
- 4) NPO法人子育てひろば全国連絡協会. (<http://kosodatehiroba.com/07kakuchinohiroba.html>)
- 5) 子育てアンケート調査票見本 ([http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kosodate/2011/hon/pdf/data\\_11.pdf](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kosodate/2011/hon/pdf/data_11.pdf) 2014.4.24アクセス)
- 6) UFJ総合研究所. 子育て支援等に関する調査(厚生労働省雇用均等・児童家庭局委託調査) (<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/05/h0502-1a.html> 2014.6.19アクセス)

**The function of the project for regional child-rearing support in  
Hiroshima Cosmopolitan University: based on survey with participants**

TOMITA Michiko

*Hiroshima Cosmopolitan University Faculty of Childhood Education*

**Abstract**

The purpose of this study is to grasp the living conditions and needs of participants who use the Open Space in the H-University, and to make basic data which identify a direction of the regional child-rearing support. In order to achieve this objective, data were collected from participant's interviewing in the child-rearing groups and were carried out some questionnaires at the Open Space. The results were as follows; (1) About 75 percent of all the parents consist of women in their thirties. And this Open Space has been used by infants from naught to two old. In addition, about six out of ten mothers have no child rearing experience until now. (2) Many participants in the Open Space are basically satisfied with their family life. (3) Many participants in the Open Space have an interest in the regional child-rearing support in the H-University. (4) Five out of ten no more parents are concerned about their children's diet at any age. And more women in their forties are concerned about increase in infant's body size. And another thing, from the description about diet, this Open Space is required to support role of parent in diet.

**Key words:** regional child-rearing support, university, open space, parent, infant